Akita University

秋　田　大　学
教養基礎教育研究年報
1 － 12　(2011)

ジェンダーからみたマンガ
－秋大生の視点から－

石井照久・川邉聡子・今野大樹・松本勇紀・目黒耕平・立花希一・望月一枝

Gender in Manga Culture among the students in Akita University

Teruhisa ISHII, Satoko KAWABE, Hiroki KONNO, Yuuki MATSUMOTO,
Kouhei MEGURO, Kiichi TACHIBANA, and Kazue MOCHIZUKI

我々の身近に存在する「マンガ」を秋田大学生がどのように読んでいるのかをアンケート調査した。その結果，男子学生はほとんど少女マンガを読まないが，女子学生のほとんどが少年マンガを読んでいることが判明した。すなわちマンガ文化の接し方にジェンダーが存在することが判明した。その要因を考察するとともに，男子学生・女子学生それぞれに好かれているマンガの特徴を，作品を解析することによって明らかにした。本報告は，秋田大学教養基礎教育科目「総合ゼミ」の講座Ｅ「文化にみられる性」において，平成22年度Ｉ期の授業で展開された成果報告でもある。

Surveying how the Akita University students read "manga, we find that while male students rarely read female manga, most of the female students read male manga. Thus it is evident that there is a gender problem in the manga culture circumstance. We also analyze characteristics of manga which male students or female students are willing to read.

This report depends on the "Gender and Sex in Culture" course of "Special Seminar" which is one of the Akita University General Education.

はじめに

「文化にみられる性」は秋田大学教育文化学部の基礎教育科目「総合ゼミ」の１講座である。教育文化学部教員分野横断型授業「総合ゼミ」（２単位）は，教育文化学部の基礎教育科目の選択必修の科目群の１つであり，過去４回開講された，まだ新しい授業科目である。この授業科目の新設の経緯・概要・授業形態，実際の２回の授業運営などについては石井（2009）の報告に詳しいので割愛したい。また「文化にみられる性」講座の３年間の実践報告を石井・立花・望月（2010）が報告している。「文化にみられる性」講座は，石井照久（動物発生学），立花希一（倫理学），望月一枝（ジェンダー学）の３名の教員（研究分野）で構成されている。平成22(2010)年はマンガをジェンダー視点からとりあげ活動を展開し，非常に有意義な成果を得たので報告したい。よって本報告は，「文化にみられる性」講座の平成22（2010）年Ｉ期の活動成果報告でもある。

そもそもマンガは私たちの身近に存在し，ものの見方や感じ方に影響を及ぼしている可能性があると考えられる。東京都の都議会には，2010年マンガが及ぼす影響を考慮し，マンガ・アニメへの規制を強化する，東京都青少年の健全な育成に関する条例の改正案が提出された（日本マンガ学会理事会は，これに対して反対声明を出している（日本マンガ学会ホームページ））。この条例案は６月に一度否決されたが，文言が修正され再提出されて12月に可決された。これらの一連の出来事は，社会において，マンガが青少年の思考に多かれ少なかれ影響を与えている事を認めている事案だと考えられる。また，2007年の「文化にみられる性」

Akita University

講座では，「秋大生の考える理想の女性像･男性像」をテーマとして研究を行っており，その報告では（石井・立花・望月；2010），秋大生の理想像形成に影響したものとして，マンガが挙げられている（女子学生の12%が影響を受けたと回答しており，男子学生の9%が影響を受けたと回答している，これはテレビ，友人，新聞・雑誌，親，につぐ5番目の影響力だった）。このようにマンガは秋大生にも確実に影響を与えていることがわかっている。

マンガは，連載される雑誌の種類（少年・男性向け雑誌か少女・女性向け雑誌か）により少年マンガと少女マンガに分類される。少年・男性向け雑誌か少女・女性向け雑誌かどうかは出版社が判断しているようである。日本での現代マンガの始まりをどこに求めるのかは非常に難しいのだが，呉（1997）は，現代マンガの前史を昭和戦前期，もう少し遡っても大正から明治後期までだろう，と述べている。また，日本での最初に日本人によって刊行されたマンガを専門とした雑誌は明治7（1874）年に創刊された「絵新聞日本地」であり，また日本最初の子どもマンガ雑誌は明治40（1907）年に創刊された「少年パック」である（京都国際マンガミュージアムのホームページより）。

そして日本で現代マンガが形作られていった頃は，少年マンガとか少女マンガとかの明確な区別はなかったようである。あえて女性を対象としたものに限定してみると，日本で最初の少女雑誌（これはマンガ雑誌ではない）は，米沢（2007）によると，明治35（1902）年に創刊された金港堂の「少女界」である（少女マンガの歴史についても，米沢（2007）に詳しい）。それ以降，明治・大正に創刊された少女雑誌には，抒情画や挿絵があった。これらの抒情画や挿絵がのちのストーリー少女マンガのルーツになったらしい。そして日本における少女向けのストーリー少女マンガの第1号は，昭和28（1953）年の「少女クラブ」一月号に初連載された「リボンの騎士」（手塚治虫著）である，という（押山，2007）。この「リボンの騎士」は少女マンガにおけるジェンダー表現の原点であるともいえる。また夏目（1997）は，少女マンガという分野があるのは日本だけであるといい，さらに戦後マンガにおいて少女マンガは女性固有のもので一段下にみなされた表現である，と述べている。

マンガに関する研究の流れを歴史的にみてみると（夏目，2004に詳しい），1940-59年代には，教育，心理学，児童文化などの専門家によって，マンガが児童教育学の研究材料となった。そして1960-69年代，様々な文化人が各専門分野からマンガについて批評しはじめた。このとき，ごく少数がマンガ研究を始めた。1970-89年代には，作品論，作家論，表現論など，マンガそのものについての批評が始まった。そして1990年から現在までは，マンガ研究が活発化した時代といえる（マンガ研究全般を把握するには，竹内（2008）が適している）。2001年には前出の日本マンガ学会が発足している（日本マンガ学会ホームページ）。

一方，マンガをジェンダー視点で論じた研究は少ないながら存在している。雲野（1996，1997，2006）は，少女マンガは恋愛至上主義，少年マンガは武闘至上主義と言える内容であり，その内容から男女が無意識にジェンダーを植え付けられている，と論じている。また，谷口（2002）は，少女マンガにおける男装をジェンダー視点から分析し，男装は少女マンガにおいてジェンダーを超える装置であると指摘している。さらに，押山(2007)は，男装の少女というヒロイン像を切り口に，日本の少女マンガにおけるジェンダー表象を歴史的に研究している。因（2010）はマンガにみられる言葉をジェンダー視点で論じている。マンガでの女性の言葉つかいは「やさしく，上品」というジェンダーがある。そしてマンガのなかのそういったジェンダー表現は，ジェンダー・イデオロギーを強化することもあれば，それを揺さぶる批評的視線を含んでいる事もある，と述べている。

しかし，これまでには，読者の視点で，読者がどのようなマンガ，すなわち，少年マンガと少女マンガのどちらを読むのか（あるいは両方）などの研究はほとんどない。それでは大学生はどのようにマンガを読んできたのだろうか。今回，秋田大学生を調査対象にアンケート調査を行い，その結果，マンガを読むというサブカルチャーにおいてどのような男女差があるのか，さらに男子学生あるいは女子学生に好まれる作品がどういうものなのかを解析する。

Akita University

アンケート調査方法

秋田大学の男子学生86名，女子学生102名の合計188名（医学部，教育文化学部，工学資源学部の3学部より）にアンケート調査に協力していただいた。アンケート調査は，2010年6月に実施した。

アンケート調査用紙の内容は次のとおりである（記入欄のサイズなどは実際に使用した用紙から変更してある）。

基礎教育科目「総合ゼミE講座」のアンケート

1507215 川邉聡子　1509224 今野大樹
1509358 松本勇紀　1509362 目黒耕平

教育文化学部の基礎教育科目の「総合ゼミ」の授業において，私たちE講座のグループは，「ジェンダーで斬る現代マンガ」というテーマで研究を進めています。その一環として，学生のマンガに関する意識を調査することになりました。アンケート調査へのご協力をお願い申し上げます。

学年（　　）年生　所属（　　）学部　（　　）課程（学科）
性別　男　・　女（どちらかに○をつけてください）　年齢　（　　）歳

（1－1）マンガを読みますか？（○をつけてください）

女性（少女）マンガとは＝少女マンガ雑誌（例：花とゆめ，マーガレット，etc…）に掲載されている（された）マンガ 男性（少年）マンガとは＝少年マンガ雑誌（例：ジャンプ，マガジン，etc…）に掲載されている（された）マンガ

1）読まない　2）女性（少女）マンガ，男性（少年）マンガ，の両方を読む
3）女性（少女）マンガ，だけ読む　4）男性（少年）マンガ，だけ読む

（1－2）それはなぜですか？（できるだけ具体的に記述してください）

（2－1）小学生からこれまでに，およそどのくらいの作品を読みましたか？（○をつけてください。9）に○をつけた場合は（　）のなかに数字を入れてください。）

1）0　2）1－9作品　3）10－19作品　4）20－29作品
5）30－39作品　6）40－49作品　7）50－99作品
8）100から199作品　9）200作品以上（およそ　　）作品

（2－2）これまで読んだマンガで好きな作品を列挙してください（複数回答可）。

（2－3）その中からお勧めの作品を1つ挙げてください。

（2－4）お勧めの作品の中の好きな男性キャラクターと女性キャラクターを一人ずつ挙げてください。名前がわからない場合は，特徴やストーリーでの役割でもいいです（たとえば主人公の男性，とか）。

男性キャラクター名：
女性キャラクター名：

Akita University

（２－５） それはなぜですか？（理由に該当する項目を，以下の５項目から選んで○をつけて，その理由と特徴を具体的に記述してください。複数回答可）

挙げた男性キャラクターを好きな理由と特徴

1）顔　（　　）
2）スタイル　（　　）
3）服装　（　　）
4）性格　（　　）
5）その他　（　　）

挙げた女性キャラクターを好きな理由と特徴

1）顔　（　　）
2）スタイル　（　　）
3）服装　（　　）
4）性格　（　　）
5）その他　（　　）

ご協力ありがとうございました！

得られたアンケート調査用紙の回答を１枚ごとに全てエクセルに打ち込みデジタルデータとした。また２－２で回答してもらった「好きなマンガ」作品を１点とし，２－３で回答してもらった「お勧めマンガ」作品を３点として，秋大生の男子学生，女子学生，あるいは両方の学生が好むマンガを選出し・解析した。

アンケート調査結果

属性調査の結果は次の表１のとおりである。

表１　アンケート調査の属性結果

	医　学　部	教育文化学部	工学資源学部	不　明	学　年	平均年齢＊	合　計
男子学生数	１名	70名	15名	０名	１－４年	19.3歳	86名
女子学生数	０名	101名	０名	１名	１－４年	19.3歳	102名
合　計	１名	171名	15名	１名	１－４年	19.3歳	188名

＊女子学生のうち１名が年齢未回答であったため，その１名を除いて平均年齢を算出した。

１－１の「マンガを読みますか？」の結果を表２に示す。

表２

	読まない	両方を読む	少女マンガだけ読む	少年マンガだけ読む	合　計
男子学生数	９名	34名	０名	43名	86名
女子学生数	14名	75名	10名	３名	102名
合　計	23名	109名	10名	46名	188名

次に表２をグラフにしたものを図１に示す。

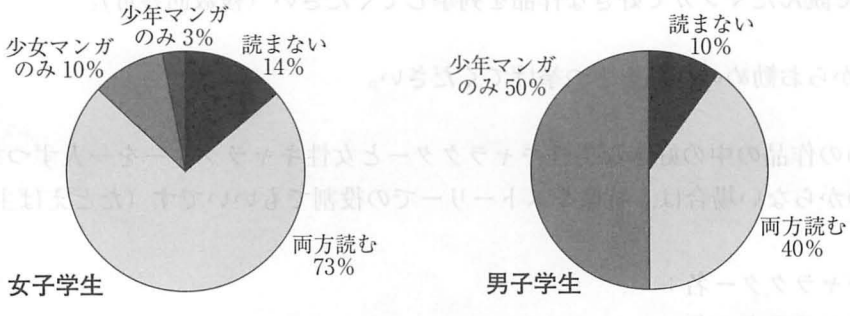

図１　秋大生は少年マンガと少女マンガのどちらを読んでいるか？

Akita University

１－１の回答からは全体の23名がマンガを読んでいないと回答したが，そのうち２－１の，小学生からこれまでに読んだ作品数への回答が0作品，という人は，たった6名であった。よってこれまでにマンガを一度でも読んだことがある，または継続して読んでいる人は188名中182名であり，ほとんどの人がマンガに触れたことがあった。ただし男性・少女マンガのそれぞれを読む割合は，図1のように男子学生と女子学生で大きな違いがあった。女子学生は，少年マンガ・少女マンガを隔てずに両方を読む人が73%近くいた。また，少女マンガのみを読んでいる人に加えて，少年マンガのみを読んでいる女子学生が少数ながらいた。一方，男子学生は，少年マンガのみを読む人が半数を占め，少女マンガのみを読む人はいなかった。両方を読む人は40%いた。この結果から，女子学生は少年マンガを読むことに抵抗感がなくなってきていることがわかった。

１－２の記述式回答の結果

「読まない」の理由は，お金がない，時間がない，マンガが好きでない，などが多かった。また，読まないと回答したうち質問２－１への読んだ作品数の回答が「0作品」の6名の内訳は，ほかの趣味がある，読む時間がない，そういう環境ではなかった，読もうと思わない，無回答2名，であった。

「両方読む」の理由は，面白い，が圧倒的に多く，マンガが好き，ひまつぶしになる，などもあった。

「少女マンガだけ読む」理由は，いろいろあり，女の子目線からの恋愛がみれ共感できたりこんな恋がしたいという憧れを持てたりして楽しいから，というのもあったり，面白い，好きだからもあり，少年マンガにはあまり興味がないから，というのもあった。

「少年マンガだけを読む」理由は，男子学生は，圧倒的に面白いから，が多かったが，少女マンガを読むのは恥ずかしい，や，少女マンガを買うのは抵抗がある，という回答もあった。女子学生は，少女マンガの絵が好みでない，キラキラしたのが苦手，少女マンガのドロドロしたストーリーが苦手，と回答していた。このように同じ少女マンガを読まない理由でも，男子学生と女子学生の間には違いがあった。

２－１の結果を表3に示す。

表3

	0作品	1-9作品	10-19作品	20-29作品	30-39作品	40-49作品	50-99作品	100-199作品	200作品以上	合　計
男子学生	4名	12名	6名	8名	11名	4名	22名	12名	7名	86名
女子学生	2名	17名	14名	14名	5名	8名	11名	24名	7名	102名
合　計	6名	29名	20名	22名	16名	12名	33名	36名	14名	188名

男子学生と女子学生ともにこれまでの人生でかなりの数のマンガ作品を読んできたことがわかった。読んだ作品数と人数をみてみると，男子学生と女子学生で若干傾向が異なるもの10作品前後と100作品前後にピークがあることがわかった。男子学生と女子学生ともに，ある程度マンガに触れる場合と，マンガにのめり込んでいる場合がありそうである。

２－２の結果

これまで読んだマンガで好きな作品をすきなだけ列挙してもらったところ，最高一人で50作品名を回答してくれた例もあった。列挙してもらった好きな作品は，総計477作品にものぼった。いかにマンガが流布しているのか，改めて認識させられる数値である。

２－３の結果

お勧め作品を1つ挙げてもらったところ，合計で105作品が挙げられた。好きな作品同様，沢山の種類の作品が読まれ，さまざまな作品が学生の共感を得ていることがわかった。

２－４の結果

好きな男性キャラクターは合計138キャラクター，好きな女性キャラクターは合計119キャラクター挙げられた。

Akita University

2－5の結果

キャラクターを好む理由を複数回答してもらったところ，次の表4のようになった。ここでは記述式の回答は省略する。なお，理由に該当する項目に○だけをつけて，その理由と特徴を具体的に記述する部分は空白な場合と，項目に○がついてさらに記述回答があるものの，2通りがあった。

表4

	顔	スタイル	服　装	性　格	その他	合　計
男子学生が男性キャラクターを好む理由	33	27	24	55	28	167
男子学生が女性キャラクターを好む理由	27	24	15	41	20	127
女子学生が男性キャラクターを好む理由	53	33	29	74	25	214
女子学生が女性キャラクターを好む理由	48	34	27	73	21	203
合　　計	161	118	95	243	94	711

男子学生と女子学生ともに，マンガ中のキャラクターを好む理由は，対象が男性キャラクターであろうと女性キャラクターであろうと，一番が性格であることがわかった。そして女子学生のほうが，第一に性格重視，第二に顔重視，の傾向がより強いこともわかった。

アンケート調査結果より選出されたマンガ作品とその解析結果

アンケート調査の2－2で挙げてもらった好きなマンガ作品を1点とし，2－3で挙げてもらったお勧め作品を3点として，合計点を算出した。その結果のトップ21を，表5に掲載雑誌と出版社などとともに示す。(掲載雑誌と出版社および発表期間は，インターネット上のフリー百科事典「ウィキペディア」によった。)

表5

順位(合計点)	作　品　名	作　者	掲載雑誌	出　版　社	発表期間*
1位（142）	ONEPIECE	尾田栄一郎	週刊少年ジャンプ	集英社	1997年－現在
2位（81）	SLAM DUNK	井上　雄彦	週刊少年ジャンプ	集英社	1990年－1996年
3位（44）	NANA	矢沢　あい	Cookie	集英社	1999年－現在
4位（34）	ドラゴンボール	鳥山　明	週刊少年ジャンプ	集英社	1984年－1995年
5位（30）	名探偵コナン	青山　剛昌	週刊少年サンデー	小学館	1994年－現在
6位（25）	BLEACH	久保　帯人	週刊少年ジャンプ	集英社	2001年－現在
7位（22）	HUNTER×HUNTER	冨樫　義博	週刊少年ジャンプ	集英社	1998年－現在
7位（22）	NARUTO－ナルト－	岸本　斉史	週刊少年ジャンプ	集英社	1999年－現在
7位（22）	あひるの空	日向　武史	週刊少年マガジン	講談社	2004年－現在
10位（21）	君に届け	椎名　軽穂	別冊マーガレット	集英社	2005年－現在
11位（20）	銀魂	空知　英秋	週刊少年ジャンプ	集英社	2003年－現在
12位（17）	ダイヤのA	寺嶋　裕二	週刊少年マガジン	講談社	2006年－現在
12位（17）	鋼の錬金術師	荒川　弘	月刊少年ガンガン	スクウェア・エニックス	2001年－2010年
12位（17）	ハチミツとクローバー	羽海野チカ	CUTiE comic→ヤングユー→コーラス	宝島社→集英社→集英社	2000年－2006年
15位（16）	のだめカンタービレ	二ノ宮知子	Kiss	講談社	2001年－2010年
16位（15）	黒執事	枢　やな	月刊Gファンタジー	スクウェア・エニックス	2006年－現在
16位（15）	ハヤテのごとく！	畑　健二郎	週刊少年サンデー	小学館	2004年－現在
16位（15）	フルーツバスケット	高屋　奈月	花とゆめ	白泉社	1998年－2006年
19位（14）	H_2	あだち　充	週刊少年サンデー	小学館	1992年－1999年
19位（14）	パラダイスキス	矢沢　あい	Zipper	祥伝社	1999年－2003年
19位（14）	リアル	井上　雄彦	週刊ヤングジャンプ	集英社	1999年－現在

＊発表期間は，掲載雑誌の年・号に基づいているため，実際の雑誌発売日と異なることがある。

Akita University

次に，トップ21の作品を上位から，合計点に占める男子学生による得点と女子学生による得点により，男子学生と女子学生の両方に支持されたマンガ作品，男子学生が好むマンガ作品，女子学生が好むマンガ作品，にそれぞれ類別することを試みた。この時，アンケート回答数の男女比（86名：102名）も考慮した。1位の作品から類別していくと両方に支持される少年マンガ，女子学生が好む少女マンガ，および女子学生が好む少年マンガ，にカテゴライズできることが判明した。しかし男子学生が好むマンガは少年マンガしかカテゴライズできないことが判明した。そこで，上位から4つのカテゴリーごとに各4作品を選出することにした。合計点16位の「黒執事」「ハヤテのごとく！」「フルーツバスケット」は，それぞれ，女子学生が好む少年マンガ，男子学生が好む少年マンガ，女子学生が好む少女マンガ，の各カテゴリーに当てはまったが，すでにそれらのカテゴリーでは上位4作品が選出されており，カテゴリー別上位4位からは外れた。同様に19位の「H_2」「パラダイスキス」は，それぞれ，男子学生が好む少年マンガ，女子学生が好む少女マンガ，であったがこれらも上位4位から外れた。同得点19位の「リアル」は，男子学生と女子学生の両方に支持される第4番目の作品となった。以下，カテゴライズされた各4作品とそれらのストーリーのジャンルおよび作品の主な表現をそれぞれ示す（かっこ書きでストーリーのジャンル，作品の主な表現，の順になっている）。

男子学生・女子学生の両方に支持されたマンガ4作品*1

ONEPIECE	（超能力・バトル）	（バイオレンス，ギャグ）
SLAM DUNK	（スポーツ）	（スポーツ，バイオレンス）
あひるの空	（スポーツ）	（スポーツ）
リアル	（スポーツ）	（スポーツ）

男子学生が好む少年マンガ4作品

ドラゴンボール	（超能力・バトル）	（ギャグ，バイオレンス）
NARUTO	（超能力・バトル）	（バイオレンス，色気）
HUNTER × HUNTER	（超能力・バトル）	（バイオレンス）
ダイヤのA	（スポーツ）	（スポーツ）

女子学生が好む少年マンガ4作品*2

名探偵コナン	（サスペンス）	（バイオレンス，日常）
BLEACH	（超能力・バトル）	（バイオレンス）
銀魂	（ギャグ・バトル）	（ギャグ，バイオレンス）
鋼の錬金術師	（超能力・バトル）	（バイオレンス）

女子学生が好む少女マンガ4作品

NANA	（恋愛）	（音楽，性描写，バイオレンス）
君に届け	（恋愛）	（日常）
ハチミツとクローバー	（恋愛）	（日常，ギャグ）
のだめカンタービレ	（恋愛）	（音楽，ギャグ，性描写）

（*1, 2本報告での選出作品と平成22年度の総合ゼミ「最終発表会」で報告した選出作品とが異なる部分である。*1最終発表会では，このカテゴリーの4位は「リアル」ではなく「鋼の錬金術師」と報告した。*2最終発表会では，このカテゴリーの4位は「鋼の錬金術師」ではなく，「黒執事」と報告した。これらの相違は，「鋼の錬金術師」を男子学生・女子学生の両方から支持された作品とするか，女子学生が好む少年マンガ作品とするかに起因している。本報告にあたり，アンケート調査結果のデータを再吟味したところ，どちらにカテゴライズするか非常に難しいデータ結果であったが，本報告では，「鋼の錬金術師」を女子学生が好む少年マンガ作品，にカテゴライズすることにした。）

Akita University

考察

秋大生を調査対象としてどのようなマンガを読むか調査した結果，男子学生と女子学生で読むマンガの傾向に違いが見出された。すなわち男子学生は少女マンガを読まない人が多いが，女子学生は少年マンガを抵抗なく読む人がほとんどであった。また少女マンガだけを読む男子学生は存在しなかったが，少年マンガだけを読む女子学生が存在した。秋大生を現在の日本の若者の一般代表として考えてよいかは別だが，秋大生では女性のほうは男性に比べ，マンガ文化にあるジェンダーの境界を乗り超えているが，男性が少女マンガの文化に触れることにはまだ抵抗があることが判明した。1960年代と1970年代頃には，少女が少年マンガを読んでいると「おてんば」といわれたが，その後，少女たちは少年マンガを抵抗なく読むようになり，逆に少年たちは，少年マンガだけを読み続けているのかもしれない。マンガというサブカルチャーにこのようなジェンダーが潜んでいた。

男女間のジェンダー意識について

2008年の「文化にみられる性」講座では，「自殺にひそむジェンダー問題」をテーマとして研究を行っており，その報告では（石井・立花・望月；2010），女性よりも男性の自殺率が高いことの一因として，ジェンダー問題があるのではないか，と指摘している。さらに，男性は女性よりも性的役割分業による責任感が強く，しかも失業などの経済困難に陥った時，相談したり頼ったりする人がいない，とも指摘している。つまり，男性のほうが世の中で辛い立場に立たされている。

一方，新井（2010）は，1990年以降，正社員の一部女性については登用が見られ，雇用において改善がみられたものの，雇用の不安定化の影響は男性よりも女性に大きく，ジェンダー格差が解消したとは言い難い，と述べ，雇用に関しては依然男性有利社会であるといっている。しかし，総務省が毎月行っている労働力調査では，2009年4月以降，ほぼ毎月，男性の完全失業率（季節調整値）が女性のそれを0.5ポイント以上上回るようになった。2010年の12月の完全失業率（季節調整値）は男性で5.3%，女性で4.4%である（総務省のホームページ）。これらは製造業と建設業の低迷による男性労働者の失業者の増大と，サービス業や福祉関連業の成長による女性労働者の需要拡大と関係があるのかもしれない。秋大生のマンガというサブカルチャーへの接し方は，まさに男女間のジェンダー規範が異なっていることを示しているのではないだろうか？

マンガにおける男性のジェンダー規範の要因は？

男子学生が少女マンガを敬遠するその理由には，少女マンガ文化に男性が触れることにより男性としての自分の評価が低下する（女々しい，男のくせに，など）ことへの恐れがあるのではないかと考えられる。アンケート調査の1－2の記述式回答（結果の記載を参照）からも，このことが裏付けられる。つまり女性文化に触れることによる，社会からのマイナスな視線を感じとっている，ということである。逆に，そもそも女性文化は，男性文化の後追いであり，女性文化は男性が管理・監視のもと与えたようなものだからという傲慢な発想のもと，男性がその文化に触れる（この場合，少女マンガを読む）必要はない，という歴史的ジェンダー思想が背景にあるのかもしれない。夏目（1997）は，少女マンガ文化は格下と述べているが，これは社会的な深層心理での共通理解なのかもしれない。

さらに，アンケート回答の記述のなかに，「妹がいて妹が読んだマンガが手に届くところにあるから」があった。ここから，男性は少女マンガを積極的に拒絶しているわけではなく，接触する機会がないから読めないだけ，という可能性が予想される。とするとこれは少子化に関連しているのかもしれない。これを検証するには，まだ少子化でなかった頃，兄弟姉妹が沢山いた頃の世代にアンケート調査を行うと答えが得られるのかもしれないが，はたしてその世代（昭和20－30年代生まれだろうか？）が大学生の頃には，現代のようにマンガが流布していたのかも疑問であるので検証は容易ではないと思われる。今から10－20年前よりも現在のほうが，コンビニエンスストアなどで，若い男性世代が手軽に，少女マンガを手にすることができるはずであることを考えると，少子化による影響は少ないのかもしれない。

やはり男性は，少女マンガを積極的に敬遠しているとみるのが妥当と思う。ここで面白いのは，

Akita University

研究のために，著者らのうちの男性も少女マンガを読んだところ，とても面白く読めたのである。つまり男性は，少女マンガの内容を知って敬遠しているのではなさそうであるということである。それは，少女マンガがアニメ化，ドラマ化，映画化されたりすると，男性もそれらを視聴し楽しむことからも理解できる。書店で少女マンガを購入するよりも，テレビなどで接するほうがよほど抵抗ないのだと思われる。その抵抗とは，上述した，女性文化に触れることからくるマイナスイメージなのか，それとも女性文化は男性文化の下，というジェンダー観からなのか，両方が少なからず影響していると想像している。

女性が少年マンガを読む背景には，女性解放・男女雇用均等などの社会状況の変化があるのだろう。さらに，男性に対する憧れもあると思われる。女性は少年マンガを読んでいても「女のくせに」「男まさり」と言われなくなったのである。そして単に恋愛ものを好む・夢見る・白馬に乗った王子様を待つ少女，ではなくなり，社会に出て活発に働く，活動的な女性へと変身し，少年マンガの武闘・スポーツ・冒険ものを好むようになったのかもしれない。女性が少女マンガという女性文化だけに閉じ込められていた時代から解放され，少年マンガを抵抗なく読むようになった。これは男性文化の後追い現象で一般的なジェンダー問題に類似している。ここには男性文化への憧れも見え隠れする。今回のアンケート調査結果で面白いのは，少年マンガだけを読む女子学生が3%存在することである。その理由は結果で挙げているが，少女マンガの「恋愛ストーリー」に飽きているし，少女マンガのリアルな人間関係（いじめ，嫉妬など）・絵のタッチが嫌いらしい。

女性が少年マンガのよき理解者である一方，男性は少女マンガに触れていない。このことはもしかしたら現代の若者の異性理解状況に影響を及ぼしている可能性がある。女性は男性を理解できているが，男性は女性を理解できていないのではないかということである。ただ，マンガの影響力も，もはや以前のようではないのかもしれない。

マンガを日常的に読まない若者の出現

アンケート調査から，これまでの人生の中でマンガを読んだことのない人は188名中6名とごくわずかであったが，図1のように，日常的にマンガを読まない率は，結構高かった。男子学生で10%，女子学生で14%であった。アンケートの回答にもあったように，大学生が一般的に忙しいから，というのは大きな理由だと思われるが，別の理由もありそうだ。インターネットと携帯電話の普及である。本を読まない人が増えた，という話だが，一般の本のみならず，マンガ本の出版数も激減している。週刊・月刊マンガ本が売れないのである。（マンガ本のレンタル店の普及や，経済的理由により新品マンガを購入せず古本店を利用する率の増加，は週刊・月刊マンガの売れ行きに影響していると考えられる。）10年以上前は，インターネットや携帯電話はこれほど普及しておらず，手軽な娯楽文化はマンガ本やテレビであったに違いない。しかしネット社会の登場で事態は大きく変わった。すなわち，若者はマンガ本すら読まなくなっているのである。今後は，マンガが与える影響よりもインターネット社会が与える影響を注視しないといけないのかもしれない。

男性が好む作品・女性が好む作品

雲野（1996，1997，2006）の指摘通り，少年マンガ（主人公は主に男性）は武闘至上主義，少女マンガ（主人公は主に女性）は恋愛至上主義であることを確認できたが，秋大生が好むマンガ16作品を解析したところ，両性に好まれるマンガ，男子学生に好まれるマンガ，女子学生に好まれるマンガ，それぞれにマンガの特徴が見つかった。

男子学生と女子学生の両方が好むマンガは4作品選出できた。この4作品は，男子学生がほとんど少女マンガを読んでおらず，男子学生が好む少女マンガを選出することができなかったため，すべて少年マンガとなった（主人公はすべて男性である）。4作品のストーリーのジャンルは，スポーツ・バトル・超能力であり，表現は，スポーツシーン・バイオレンスシーン・ギャグシーンが多い。これらは後述の男子学生が好む作品のストーリーと表現はほぼ同じであるが，色気シーンが少なかった。このことが女子学生に受け入れられている原因かもしれない。ただしONEPIECEは合計点1位で，しかも男子・女子学生の両性に好まれているマンガなのだが，女性キャラクターが10頭身くらいで描かれていたり，露出度も高かった

Akita University

り，バイオレンスシーンも多い，という特徴があるにもかかわらず女子学生からも圧倒的な支持を得ていた。これはこの作品に登場するさまざまなユニークなキャラクターやストーリー性の高さが原因なのかもしれない。

男子学生が好む少年マンガ4作品（主人公はすべて男性である）には，雲野（1997，2006）の指摘通り武闘至上主義の傾向が見られる。ストーリーは様々だが大筋は，ある目標や使命の為に冒険・鍛錬をするというものがほとんどだった。また女性キャラクターの人離れしたプロポーションや露出度の高さが目立っていた。

女子学生が好む少年マンガ4作品（主人公はすべて男性である）には，ストーリーよりもキャラクターの魅力を重視するという傾向がある。登場人物は，男性でも女性でも，モデルのようにスタイルがよく，また瞳は大きく，顔も整って描かれている。これらは女性に好感を持たれる要因になっていると考えられる。また，これらの少年マンガは，少女マンガに見られない戦闘シーンや非日常を描いていた。やはり，女性は，家に閉じこもって白馬に乗った王子様を待てなくなり，自ら冒険に出て，活発的に行動したいと願っているのかもしれない。女性は，少女マンガの恋愛一辺倒に飽きており，少年マンガのストーリーに興味を持っているようである。ただ，男子学生が好む少年マンガにはない，日常シーンがしばしば描かれている作品が女性から選ばれているのもポイントなのかもしれない。

女子学生が好む少女マンガ4作品（主人公はすべて女性である）は，これまた雲野（1996，2006）の指摘通り，すべて恋愛至上主義のストーリー内容であった。そして，登場人物の瞳は，大きくきらきらと描かれている。さらに背景には，花柄やトーンが用いられている。これは，押山（2007）や米沢（2007）が指摘する少女マンガの典型的な技法である。きらきらした瞳やバラなどの背景が少女マンガの常識で，これこそ女性が読むものである，という知らないうちに固定化されてきた少女マンガのジェンダー表現を女子学生・男子学生ともに刷りこまれているのかもしれない。

キャラクターを好きな理由に男女で共通点がある

男子学生と女子学生ともに，マンガ中の男性あるいは女性キャラクターを好む理由は，一番の理由が性格であることがわかった。男子学生，女子学生ともにキャラクターを好む理由は似たような傾向であったが，女子学生のほうが，第一に性格重視，第二に顔重視，の傾向がより強いこともわかった。意外と学生たちは，外見よりも内面を重視しているのだろうか。しかし，表4のデータを顔，スタイル，の2項目の両方が外見だと解釈し，性格を挙げた数と比較してみると，男子学生と女子学生の両方において，外見重視でキャラクターを好んでいるという結果になる。さらには，登場キャラクターの服装は，そのキャラクターの性格を反映しているのだからと考え，顔＋スタイル＝外見，服装＋性格＝内面として，再度データを見直してみると，内面重視という結果になる。どう判断したらよいか迷うところである。そこで記述回答をみてみる。

記述回答をみてみると，86人中55人の男子学生が男性キャラクターを好む理由を性格と答えているが，ほかにも多様な意見があった。そして顔・スタイルを理由にあげた記述回答では，美醜ではなく個性が際立っているキャラクターを選んでいることがわかった。その他の項目を理由にあげた記述回答では，特殊な能力を使える点を挙げている人が多かった。女性キャラクターについては，男性キャラクターと同じ割合で，性格について記述回答しており，「気が強い，しっかり者」と「優しい，おっとりしている」のどちらかの回答に分けることができた。顔についての記述回答は「可愛い」か「美人」が多く，スタイルは胸の大きさに関する記述が多かった。

女子学生が男性キャラクターを好む理由の記述回答では，顔については「かっこいい」という意見が多かった。スタイルについては「細身」か「がっちり」しているか，のどちらかに回答がわかれた。性格についての記述回答には「優しい」，「リーダーシップを持っている」という意見があった。女性キャラクターを好む理由では，顔についての記述は「かわいい」が圧倒的に多かった。また「美人，綺麗」という意見もあった。スタイルの記述回答は男性キャラクターと同じく細身でスタイルが良いことを挙げていた。性格についての記述回答は，「一途，一生懸命」や積極的な性格に共感を得ている，という意見が多かった。

Akita University

これらの記述回答と表4のデータから，そして，顔＋スタイル＝外見，服装＋性格＝内面として考えてみると，男子学生・女子学生ともにキャラクターをみる場合，やや内面重視であるがほぼ同じ重みでみている，と判断される。キャラクターの何を重視しているかを調べることによって，マンガから影響されるものを解析できるのでは，と考えたアンケート項目であったが，外見と内面，同じくらいの割合で影響を与えているようである。

最後に

現代マンガには，表現・ストーリーにジェンダーが存在することを再確認できたが，さらに現代マンガというサブカルチャーへの接し方にジェンダーバイアスがあることが今回判明した。昭和後半から大衆文化として広く流布した現代マンガは，アニメ化されたり，ドラマ（実写）化されたりして，広く人々に親しまれている。それゆえに，マンガにおけるジェンダー表現は，広く人々に影響を与えるものと思われる。しかし，週刊マンガ雑誌の売れ行きが落ち込み，時代はインターネットという新たなメディアの出現により大きく変わり始めている。そしてマンガ自体もその形態を変えつつあり，電子端末による購読も可能となってきた。（電子端末による購読方法は，店頭で購入する必要がなく恥ずかしさや人眼を気にしなくてよいため，男女間の逆差別現象を解消するきっかけになるのかもしれない。）インターネット上では，本人・実物が露見しないことが普通なため，「ネカマ（ネット＋オカマ）」なる女性を装う男性が登場しているという。逆に男性を装う女性も登場するという。（出会い系サイトで知り合った二人が同性同士だった，という笑い（？）話もある。）インターネット上では，実際の性を隠すことができるため，自由な発想・表現が可能となり，もしかするとインターネットはジェンダーフリーを促進する媒体に成り得るのかもしれない。しかし，インターネットは影響力が強いため，ジェンダー・イデオロギーを強化する媒体ともなる。今後，インターネットをはじめとして，ジェンダー・イデオロギーを強化する，マンガにとってかわる影響力を持つものが出現する（すでに出現している？）かもしれない。注視していきたい。

謝辞

アンケート調査にご協力をいただいた秋大生の方々にここで深く御礼申し上げます。

参考文献

新井美佐子（2010）;「ワーク・ライフ・バランス」社会実現の可能性．越境するジェンダー研究 （財）東海ジェンダー研究所記念論集編集委員会（全510頁） 明石書店 東京都千代田区 pp62 － 75

石井照久（2009）；教養基礎教育科目「総合ゼミ」の実践報告．秋田大学教養基礎教育研究年報 11：1-8

石井照久・立花希一・望月一枝（2010）；教養基礎教育科目「総合ゼミ・講座E・文化にみられる性」の3年間の実践報告．秋田大学教養基礎教育研究年報 12：1-27

雲野加代子（1996）；漫画におけるジェンダーについての考察―少女漫画の恋愛至上主義―．大阪明浄女子短期大学紀要 10：187 － 196

雲野加代子（1997）；漫画におけるジェンダーについての考察―少年漫画の武闘至上主義―．大阪明浄女子短期大学紀要 11：157-169

雲野加代子（2006）；漫画におけるジェンダーについての考察―恋愛と武闘―．大阪明浄大学紀要 6：77-85

押山美知子（2007）;少女マンガ ジェンダー表象論－〈男装の少女〉の造形とアイデンティティ．全300頁 彩流社 東京都千代田区

京都国際マンガミュージアムのホームページ；http://www.kyotomm.jp/HP/about_syozo.html#top

呉智英（1997）；現代マンガの全体像．全309頁 双葉文庫 東京都新宿区

総務省のホームページ；http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/index.htm

竹内オサム（2008）；マンガ研究ハンドブック．全246頁 竹内長武研究室 京都市上京区

谷口秀子（2002）；少女漫画における男装―ジェンダーの視点から―．言論文化論究（九州大学言語文化部）15：105 － 114

因京子（2010）；マンガ―ジェンダー表現の多様な意味．ジェンダーで学ぶ言語学 中村桃子編（全254頁）世界思想社 京都市左京区 pp73 － 88

夏目房之介（1997）；マンガはなぜ面白いのか その表現と文法．全279頁 NHK出版 東京都渋谷区

夏目房之介（2004）；マンガ学への挑戦 進化する批評

Akita University

地図. 全 238 頁　NTT 出版　東京都目黒区
日本マンガ学会のホームページ；http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsscc/index.html
フリー百科事典「ウィキペディア」
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%82%B8
米沢嘉博（2007）；戦後少女マンガ史. 全 393 頁　ちくま文庫 東京都台東区